

【研究主題】 自ら考え判断し，表現できる力をはぐくむ学習指導の在り方に関する研究
 - 各教科等の言語活動の充実を通して -

1 「自ら考え判断し，表現できる力」について

(1) 「自ら考え判断し，表現できる力」とは

本研究における「自ら考え判断し，表現できる力」とは，児童生徒の主体的に学習に取り組む態度を基盤とした思考力・判断力・表現力を意味する。

今回の学習指導要領の改訂では，生きる力の育成という理念が，知識基盤社会と言われる現代社会においてますます重要となっていることから，これを継承し，生きる力を支える確かな学力，豊かな心，健やかな体の調和のとれた育成を重視している。

「自ら考え判断し，表現できる力」は，その「生きる力」の知の側面である「基礎・基本を確実に身に付け，いかに社会が変化しようとして，自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力」，すなわち「確かな学力」の中核となる重要な力であるといえる。

さらに，「自ら考え判断し，表現できる力」は，それぞれ別々の力としてとらえるのではなく，それぞれが有機的に結び付いた総合的な力としてとらえることが大切である（図1）。それは，自分が思考・判断したことは，表現することで考えを整理したり明

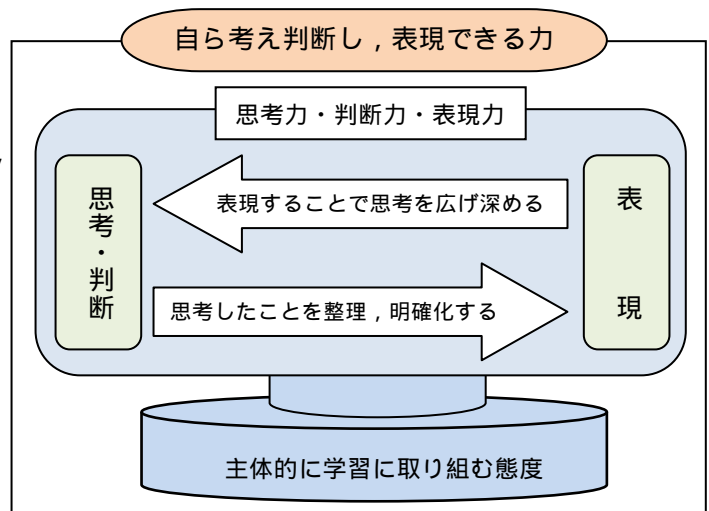


図1 「自ら考え判断し，表現できる力」の考え方

確化したりするとともに，自他の考えを広げたり深めたりすることにつながるからである。すなわち，思考・判断と表現が相互に作用し，総合的な力として高まっていくと考えられる。

(2) 「自ら考え判断し，表現できる力」が求められる背景

ア 国の動向から

全国的な児童生徒の学力・学習状況については，これまで，全国学力・学習状況調査や教育課程実施状況調査，PISA調査などの国際的な学力調査などで実態把握が行われてきた。

これらの調査結果から，基礎的・基本的な知識・技能の習得については，個別には課題がみられる事項もあるものの，全体としては一定の成果が認められるが，思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題に課題があることが明らかになった。

また，平成19年6月，学校教育法の一部改正により，学力の重要な要素は，基礎的な知識・技能の習得，知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力等，学習意欲であることが示された。

これらを受けて，新学習指導要領の改訂の基本方針の柱の一つとして，「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること」が挙げられ，言語に関する

能力の育成を重視し、各教科等において言語活動を充実することが求められた。また、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、家庭との連携を図りながら、学習習慣を確立することも重視している。

イ 県の動向から

平成 21 年 2 月に策定された「鹿児島県教育振興基本計画」においては、「あしたをひらく心豊かでたくましい人づくり」を基本目標とし、特に、「知・徳・体の調和がとれ、主体的に考え行動する力を備え、生涯にわたって意欲的に自己実現を目指す人間」の育成の視点の一つとして、「一人一人が学ぶことの楽しさを知り、基礎的・基本的な知識・技能を習得し、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力や判断力、表現力等を身に付ける」ことを挙げている。

本県の公立小・中学生の学力の実態については、「基礎・基本」定着度調査や全国学力・学習状況調査の結果から、基本的な知識・技能については定着が見られるが、それらを活用する力を問う問題への対応が不十分であるという課題がみられた。

この結果から、同計画では、「今後は、基礎的な知識や技能の確実な定着を図ることはもとより、知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力や判断力、表現力等を習得させることが必要」であることを指摘している。

また、当教育センターでは、「生きる力を豊かに育てる学校教育の創造」という全体テーマの下、その視点の一つとして「学力向上を図る授業の充実」について研究を進めてきた。特に、教科教育研修課では、平成 18～20 年度に、小中高の指導内容の系統性を重視し、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る学習指導の在り方について研究を行った。そして、その成果と課題を踏まえて、平成 21 年度から知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育成する学習指導の在り方について研究することとした。

2 「各教科等の言語活動の充実」について

(1) 「自ら考え判断し、表現できる力」と「言語活動の充実」

新小学校学習指導要領総則の「第 1 教育課程編成の一般方針」には、言語活動の充実のねらいが、学校教育法で示された学力の三つの要素を育成することであることが、次のように示されている。（中・高も同様）

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

これは、知識・技能を習得することも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現することも言語によって行われるものであり、これらの学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力であると考えられるからである。さらに、言語は論理的思考だけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心をはぐくむ上でも、言語に関する

能力を高めていくことが求められているからである。

したがって、言語に関する能力の育成を重視し、各教科等において言語活動を充実することは、主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、思考力、判断力、表現力、すなわち「自ら考え判断し、表現できる力」をはぐくむことにつながるのである。

(2) 本県における言語活動の取組の状況

本県における各教科等の言語活動の取組について実態を把握し、言語活動の充実を図る学習指導の在り方について研究を進めるために、次のような実態調査を行った。

1	調査名	言語活動の取組に関する実態調査
2	調査対象	県内全公立小・中・高等学校・特別支援学校
3	回答状況	小学校581校，中学校256校，高等学校80校，特別支援学校15校（回答率100%）
4	調査期間	平成21年10月19日～11月6日
5	調査方法	質問紙調査
6	調査内容	学習指導全般，年間指導計画の状況，各教科等における取組について
7	回答方法	4段階の評定法（一部，自由記述） 4「とてもあてはまる」 3「ややあてはまる」 2「あまりあてはまらない」 1「まったくあてはまらない」

調査結果で明らかになった，学習指導全般，年間指導計画の状況について，課題がみられた点を中心に考察する。なお，各教科等の取組の現状については，第4章で述べる。

ア 学習指導全般について

問1の「『聞くこと』『話すこと』『読むこと』『書くこと』などの言語活動を生かした学習指導」については，各校種とも「4」と「3」の回答が合わせて，80%以上で，意図的に取り組まれている状況である（図2）。

問3の「辞書，新聞の活用や学校図書館の利活用などを通して，児童生徒が思考を深める指導」については，中・高・特別支援学校で「4」と「3」の合計が80%を割り，言語活動を支える語彙力や言語に触れる機会の向上などのためにも，各学校で一層充実することが求められる。

問5の「予習や復習の仕方等，家庭学習についての指導」については，高等学校，特別支援学校で「4」と「3」の合計が80%を割り，学習意欲の向上や学習習慣の確立のための取組を充実させることが重要である。

イ 年間指導計画の状況について

問1の「言語活動を組み込んだ年間指導計画の必要性の共通理解」については，中・高・特別支援学校で「4」と「3」の合計が80%を割り，問3の「考えを説明するための話し合い活動を取り入れた年間指導計画」については，すべての校種で「4」と「3」の合計が70%を割り，改善を要する状況である（図3）。

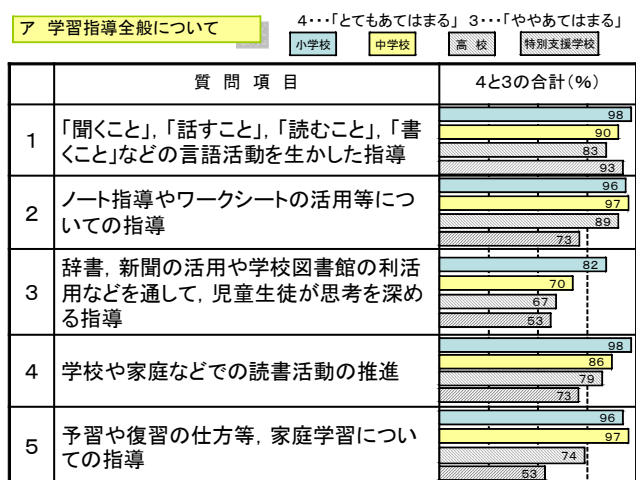


図2 「学習指導全般」に関する調査結果

言語活動は意図的・計画的に行うことでその成果が得られるものであり、年間指導計画に明確に位置付けることが大切である。

なお、「年間指導計画作成について留意していることや課題としていること」について自由記述を求めたところ、「校内研修を実施し、共通理解を図ること」や「言語活動の時間確保」等の課題が多く挙げられた。言語活動の充実のねらいや進め方などについて、校内で共通理解

するとともに、各教科等の関連を図りながら、各教科等で行う言語活動を有機的に結び付け、相乗的に児童生徒の思考力・判断力・表現力を育成することが大切である。

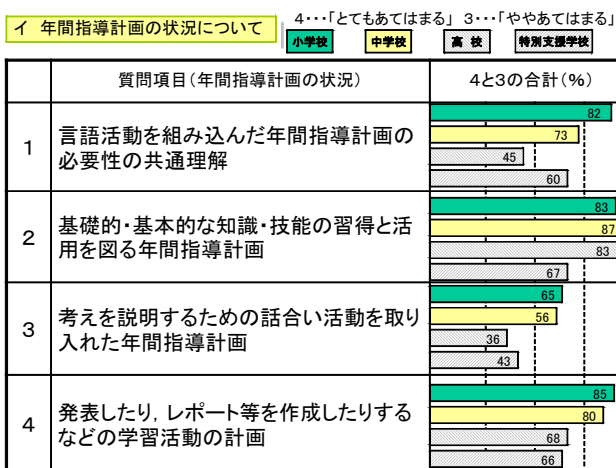


図3 「年間指導計画の状況」の調査結果

第2章 各教科等における「言語活動の充実」のとりえ方

言語活動については、これまでも各教科等で取り組まれてきたところであるが、児童生徒の確かな学力の定着に結び付いていないという課題もみられる。

また、今回の学習指導要領の改訂において、言語に関する能力の育成に全教育活動で取り組むことや、各教科等の関連を十分に図ることが求められている。

これらのことから、各教科等においてこれまでの取組を振り返り、課題を把握するとともに、「言語活動の充実」をどのようにとらえるかを明確にして研究を進めていくことが大切である。

そこで、本調査研究では、各教科等における「言語活動の充実」を表1のようにとらえ、研究を進めた。

表1 各教科等における「言語活動の充実」のとりえ方

教科等	「言語活動の充実」のとりえ方
国語科	各領域において、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、日常生活や社会生活に必要とされる記録、説明、報告、感想、討論などの言語活動例を学校や児童生徒の実態に応じて具体化し、充実すること。
社会・地歴・公民科	地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視すること。
算数・数学科	言葉や数、式、図、表、グラフなどの数学的な表現を用いて解決の方法を考えたり、自分の考えを筋道を立てて、根拠を明らかにして相手に分かりやすく説明したり、互いに考えを表現し伝え合ったりするなどの学習活動を充実すること。
理科	問題を見だし観察、実験を計画する学習活動、観察、実験の結果を分析し解釈する学習活動や、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動を充実すること。
外国語活動	コミュニケーションを図る楽しさを体験することを目的として、身近な外国語に慣れ親しんだり、伝え方を工夫したりする活動を充実すること。
外国語科	聞いたり、読んだりして理解した内容等について、自分の体験や知識などと結び付けながら考えたことを、話したり、書いたりして表現するなど4技能を統合的に活用する活動を充実すること。

ここでは、各教科等に共通する「自ら考え判断し、表現できる力」をはぐくむ言語活動の充実の視点について述べる。各教科等の特質を踏まえた視点と具体的な取組については、第4章で述べる。

1 学習のねらいに沿った言語活動の位置付け

(1) 系統性を重視した身に付けさせたい力の明確化・重点化

言語活動は、各教科等の目標達成に有効にはたらくものでなくてはならない。そのためには、各教科等の指導内容の系統性を重視し、どの学年の、どの学習で、どのような力を身に付けさせるのか明確にしたり、重点化したりすることが大切である。その上で、どのような言語活動を行うことが有効なのか十分に検討して取り組むことが必要である。

表2は、社会科で作成した充実させたい言語活動例を明記した指導内容系統表である。単元ごとに指導内容、充実させたい言語活動例、育てたい力の三つを関係付けて示すことにより、学習のねらいに沿った言語活動を行うことができる。

表2 社会科における言語活動例を明記した指導内容系統表（単元「気候」）

項目		小学校	中学校	高等学校
指導内容	学習指導要領に示された内容	・ 我が国の国土の自然などの様子について、地図その他の資料を活用して調べ・・・。	・ 自然環境から見た日本の地域的特色と世界的視野・・・。	・ 世界の地形、気候、植生などから系統地理・・・。
	押さえておきたい基礎的・基本的な知識	・ 北海道以外では5月から7月にかけて梅雨の時期になり、曇りや雨の日が続く。 ・ 夏は気温や湿度が高いので蒸し暑い。	・ 夏前に、日本列島に前線が停滞し梅雨になる。 ・ 梅雨が明けると太平洋からの・・・。	・ 初夏にはオホーツク海気団と小笠原気団との間にできた梅雨前線帯が・・・。
充実させたい言語活動例		・ 日本の南と北とでは気候にどのような特色が見られるのか、また気候と人々の生活や産業との関連についてまとめ、発表する。	・ 国内では、気候において地域差が見られることを諸資料を基に読み取ると・・・。	・ ケッペンの気候区分等の諸資料を基に、世界の気候の特色についてまとめ・・・。
育てたい力	自ら考え、判断する力	・ 我が国は南と北とでは気候に大きな違いがあり、人々の暮らし方にも違いが見られるといったことについて多面的に考察することができる。	・ 世界的視野から見た日本の気候の特色について多面的・多角的に考察することができる。	・ 世界の気候の特色について、気温と降水量の分布や地球規模でみた海流に・・・。
	資料を活用し、表現する力	・ 我が国の南と北の気候の特色に関する各種の基礎的資料を活用して調べ、気候の特色や人々の暮らし方について違いが見られるといったことを分かりやすく表現することができる。	・ 世界の気候の特色や日本の気候の特色などに関する様々な資料を収集し、適切に選択・活用して調べ、世界・・・。	・ 世界や日本の気候の特色に関する様々な資料を収集し、適切に選択・活用して調べ、大気の大循環・・・。

(2) 思考力・判断力・表現力等をはぐくむための学習活動の具体化

平成20年1月の中教審答申では、思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、次のような学習活動を行うことが重要であると提言している。

体験から感じ取ったことを表現する。
 事実を正確に理解し伝達する。
 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
 情報を分析・評価し、論述する。
 課題について、構想を立てて実践し、評価・改善する。
 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

これらの活動を各教科等の特質や児童生徒の発達の段階に応じて具体化し、言語活動を充実させることが重要である。

例えば、理科においては、上述の六つの学習活動例を理科の視点でとらえなおすとともに、

各校種の新学習指導要領における言語活動の充実に関する記述から「小・中・高を通じた充実すべき学習活動」としてまとめ、それらを総合して理科における言語活動例として次のように具体化した。

習得した知識・技能を活用して新たな観察，実験等を計画する活動（比較・分類によって問題を見だし，関連付けによって見通しを発想するなど，考えるための技法を使って課題を整理する。）

予想や仮説の検証方法を考察する場面で，自分の考えを述べる場や，集団としての意思決定をするような場を設定するなど，話し合いながら考えを深め合う活動

観察，実験の結果をグラフや図表に整理し，予想と関連付けながら考察する活動
自然事象に関する情報をグラフや図表などから読み取ったり，グラフや図表を用いて分かりやすく表現したりする活動

観察，実験の結果について科学的な言葉や概念を使用して考えたり，説明したりするなど，概念や法則などを活用する活動

習得した知識・技能等を活用して，他の関連する事象に当てはめて説明するなど，学習の成果と身の回りの事象等との関連を図る活動

なお，国語科や外国語科では，学習指導要領に言語活動（例）が示されており，先に述べた六つの学習活動例を踏まえながら，その言語活動の具体化や使用場面の設定を行い，具体的な学習活動を計画することが必要である。

例えば，中学校外国語科の言語活動においては，聞いたり読んだりしたことについて適切に理解し，自分の感想や意見を話したり，書いたりすることが示されているが，その際，実際の言語の使用場面の設定や言語の働きを意識した指導が必要となる。

具体的には，友人の休日の過ごし方についてのスピーチを聞いて感想を述べるといった活動を組み立てる際，電話での対話という状況の設定を行った上で，必要となる気持ちを伝える表現例を示し練習することで，より自然で円滑な言語活動にすることができる。このように，学習のねらいに照らして，具体的で分かりやすい状況を設定し，その場面に適した言語材料をどのように活用させるかを十分に検討して行わなければならない。

(3) 学習過程に応じた言語活動の工夫

これまで言語活動は，単元の最後の応用的な学習や，学習成果の交流活動としてとらえられる向きもあった。しかし，言語活動のねらいが「自ら考え判断し，表現できる力」の育成であることを考えると，学習過程の各段階でそれぞれのねらいに沿って，思考・判断・表現につながる言語活動を工夫していくことが必要である。

例えば，国語科では，次頁表3のように，学習過程の各段階でどのようなねらいをもった言語活動が考えられるか整理し，そのねらいに沿った言語活動を具体化し，単元の学習計画を立てる工夫・改善を行った。

また，理科では，問題解決の過程と，それぞれの過程で求められる言語活動の関係を明らかにした。例えば，「問題を見いだす段階」では，「比較・分類することによって問題を見だし，関連付けることによって見通しを発想するなど，考えるための技法を使って課題を整理する活動」，「見通しをもつ段階」では，「予想や仮説の検証方法を考察する場面で，自分の考えを述べる場や，集団としての意思決定をするような場を設定するなど，話し合いながら考えを深め合う活動」など，それぞれの段階で求められる言語活動を例示している。

表3 「読むこと」領域の学習過程の各段階における言語活動のねらい(国語科)

学習過程	言語活動のねらい
つなぐ	これまで学習したことを振り返り，これからの学習に関連付けること
つかむ	どのような課題をもって学習を進めたらよいかを考えて学習課題をつかむこと
見通す	どのような流れで学習を行っていくか学習計画を立てたり，読みの視点を明らかにしたりすること
調べる	課題解決に向けて，調べ読みをする過程において，観点を明確にして読むこと，根拠を明らかにして読むことや考えを整理して読むこと
交流する	それぞれが読み取ったことを交流し，自分の考えを広げたり，深めたりすること
振り返る	学習で身に付けた基礎的・基本的な知識・技能をまとめたり，整理したりすること 学習課題が解決したことを確認すること
生かす	学習を通して獲得した自分の言語能力を生かして，実際に伝え合うこと

2 年間指導計画への位置付け

各教科等で効果的に言語活動を行っていくためには，指導内容の系統を把握し，ねらいに沿った言語活動を意図的・計画的に行うことが重要である。そのためには，各単元(教材)で効果的であると考えられる言語活動を年間指導計画に位置付け，見通しをもつことが大切である。

また，「言語活動の取組に関する調査」の結果で明らかになった「言語活動の時間確保」という課題を考えると，1年間を見通し，教科間，単元(教材)間の指導内容の関連をとらえ，効果的で効率的に活動が行われるよう計画していく必要がある。

さらに，各教科等における言語活動の充実にあたっては，言語活動の充実の意義について，全職員が共通理解し，実践しなければならない。そこで，学校が各教科等の指導計画にこれらの言語活動を位置付け，各教科等の連携を図りながら，授業の構成や進め方を改善する必要がある。特に教科担任制の中・高等学校では，意識的に教科間の連携を図ることで，その成果を十分に上げる工夫が求められる。

3 言語環境の整備

児童生徒の言語活動の充実のためには，児童生徒を取り巻く望ましい言語環境を整備することが大切である。

(1) 読書活動の充実

児童生徒の言語活動の基盤となる言語に関する能力を育成するためには，児童生徒が多くの本や文章に触れる機会を拡充する必要がある。

そのためには，各教科等の学習活動と読書活動を関連付けて，それぞれの学習内容に応じた読書につながるような働き掛けを行うことが大切である。

また，学校図書館の積極的な活用がなされるように，継続した読書の時間の計画的な設定や図書館の利用指導の一層の充実を図っていかなければならない。

(2) 児童生徒の言語生活を取り巻く適切な環境づくり

新学習指導要領解説総則編には、学校全体における言語環境の整備について、次のような点に留意することが挙げられている。

教師は正しい言語で話し、黒板などに正確で丁寧な文字を書くこと
校内の掲示板やポスター、児童（生徒）に配布する印刷物において用語や文字を適正に使用すること
校内放送において、適切な言葉を使って簡潔に分かりやすく話すこと
適切な話し言葉や文字が用いられている教材を使用すること
教師と児童（生徒）、児童（生徒）相互の話し言葉が適切に行われるような状況をつくること
児童（生徒）が集団の中で安心して話ができるような教師と児童（生徒）、児童（生徒）相互の好ましい人間関係を築くこと

各教科等で行う言語活動だけではなく、日常生活の中の会話や、見たり、書いたりする言葉などに対する意識や関心を高めるとともに、積極的な会話や話し合いができるような環境づくりに配慮することが大切である。

(3) 思考・表現を促す発問や思考したことを表現するための発表話型の工夫

児童生徒がどのように考え、表現したらよいかに気付かせ、思考や表現の基本的なパターンを身に付けさせたり、思考や表現を促したりするために、発問を工夫することが大切である。

算数・数学科では、次に示すように学習過程に応じて思考や表現を促す発問を工夫し、授業を構成してきた。（発問例は一部掲載）

<課題把握> 式だけでなく、図や表、グラフなどを用いて、考えることはできないかな。
<見通しをもつ> 式を図にして友達に説明できないかな。
<自力解決> これまでのどの学習を活用すれば問題の解決ができそうかな。
<相互解決> 友達の考えと、どこが同じで、どこが違うだろう。
<振り返り・まとめ> 式からどんなことが分かるかな。

また、思考・判断したことを論理的に表現する手だてとして、児童生徒の発表話型を教科の特質を踏まえて、工夫することが考えられる（図4）。先に述べた発問と発表話型を組み合わせることにより、思考が深まり、論理的な表現につながっていく。

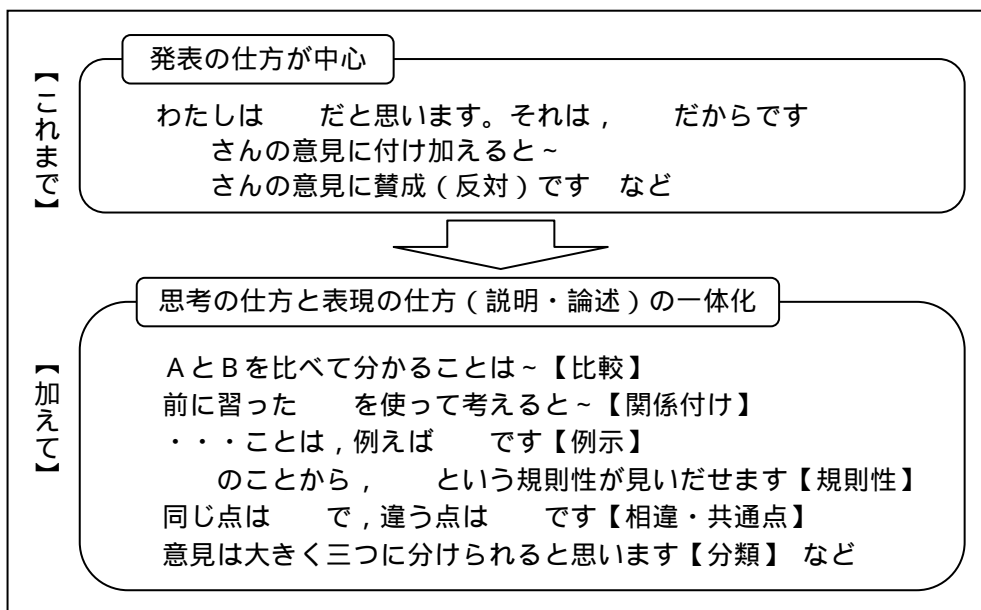


図4 思考と表現をつなぐ発表話型の工夫